

月刊 中東レポート

第 92 号

発行 ウニタ書舗
 東京都千代田区神田神保町1-52
 TEL (03) 3291-5533
 編集 J. R. A.
 郵便振替 東京1-48443
 三菱銀行神保町支店 当座9012656
 会員制 年会費24,000円

目次
 米国の中東イニシアチブの頓座
 資料
 民主主義と団結のよびかけ
 一〇組織声明 (抄)
 「ガザ第一論」の浮上 (抄)
 ファタハ内で反乱が起っている (抄)
 イスラエル——殺しのライセンス (抄)
 和平過程の進展 (?) (抄)
 ラビン内閣の危機と差別 (抄)
 被追放者たちの現状

1

イニシアチブの頓座 II 破綻方向がいつそう明確になつてきているのが実情である。
 今号では、そうしたところに焦点をあててみたい。

第一〇次交渉とクリストファーの失望

第一〇次交渉に先だって、米国とパレスチナとの討議が、六月一日からワシントンで持たれた。米側は、この討議で交渉の前進への土台を作ったとした。が、エレカット氏は「米国との違いは相変わらず大きく、エルサレム問題、人権問題、交渉での米国の役割、米＝PLO討議の再開、被占領地の経済状況の改善といった五点がその中心点である」と語っていた。

同一五日から開始された第一〇次交渉は、クリストファー＝米政権の楽観的な予測とはまったく逆に、交渉は最初から膠着状況。簡単に言えば①パレスチナとイスラエルは、安保理決議二四二を巡って対立、とりわけ、暫定自治にエ

ほとんどの首脳が内部にさまざまな問題を抱え、国際的なイニシアチブを發揮できる状況ではなく、「最悪の首脳たちの会議」とさえ評された、東京サミット。そこで、ほとんどの首脳が「成功」や「成果」を喧伝してみせた。が、要は、玉虫色ということの自己暴露であって、彼らの言葉とはまったく逆に、サミットの成果なるものや、世界経済を含めた今後の見通しの暗さを証明することになった。

同サミットでの中東に関する決議は、イラク、リビアそしてイランを名指しで非難しているが、ニストの意向を国際的な正當性でもあるかの例によつて、最大のテロ実践国であり、度重な

る国連決議や国際法の違反国であるイスラエルに対するは、非難をするどころか、アラブ・ボイコット撤廃要求のプレゼント。こうしたありが中東において、非難されこそすれ、歓迎されるはずはなかつた。

サミット前の第一〇次交渉はなんの進展もなく、米国は、その後、取り繕い外交を展開し、またしても楽観論を打ち上げてはいるが、国際的な報道機関もアラブとの落差の大きさを指摘。イラクへのミサイル攻撃、なども含めて、シオニストの意向を国際的な正當性でもあるかのように展開せんとする、クリントン政権の中東

にもかかわらず、ほとんど進展を作ることはできなかった。むしろ、パレスチナ問題（とりわけエルサレム問題）とレバノン問題でのアラブ側の一貫した対応に、直面しただけであった。アラブ側が、交渉を継続するとして、米国のいう中間地點ではなく、国際的な正当性を前面に押し立てて、シオニスト側と対決する姿勢を示している。それは、国際的な正当性と米ソ（当時）の最初の約束が彼らの側にあること、そして将来的に米国の政策は破綻するという見通しに立っているからであり、現在米国と喧嘩することは、「アラブが和平を破壊した」といった非難を招くことにならぬ、そのような無益な対立は避け、シオニスト側が破綻していくのを待つ、という基本戦略から、と言えよう。たとえば、ロス一行は、エジプト当局との会議は有意義であり、和平の前進に向けて勇気付けられた」と、発表した。が、国際的な報道機関も、ヘーベル・ラハマン師の送還問題

リアを訪問。その共同記者会見で、アサド・シリヤ大統領は、「交渉団長からは、前進というより、むしろ後退しているという意見が示されているが、「全面的なパートナーとしての役割を果たす」という米国の公約を判定するにはまだ十分とは言えない。それをテストするためにも、交渉を継続する」という見解を表明した（七月八日）。

米国は、こうした動きを歓迎し、ロスらの歴訪は進展の土台を打ち固めうると見なした。

支持率の上下は米国の独善的な方を暴露し、いつそう国際的な不信を作ることにもなつたが、アラブの紙誌は、「米国の地域への存在はいったいなんのためか、地域の安全保障のためか、それとも侵略のためか。なぜ同様のあり方をセルビアやイスラエルに対してとらないのか」、「もはや湾岸戦争時の同盟関係はファイナルに閉じられ、伝統的な米国の侵略的な姿を明らかにした」、「「ブッシュ暗殺未遂を「臆病者の手段」とよんだクリントンは、まったく同じ手段を用いた」などの非難を展開。そして、「クウェートでの裁判のいいかげんさとサミットの決議も反映し、イラク、リビアへの制裁の解除を求める声の高まりとなつていて」。

ここでは六月三〇日に現れた諸例を挙げる。

E C開発委員長は、リビア訪問とその後の検討の結果「私はすべての要因が制裁の解除を示していると考える」と発表。カイロで開かれていた

1993年8月31日 第92号 月刊 中東レポート

りも、むしろ、「イスラエル側の対応は討議を後退させるもの」と、シャマス・レバノン代表は非難した。

にもかかわらず、クリストファーは、同二三日に至つても、「米国は全面的なパートナーとしての役割を演じている。われわれはこの回で良き進展を作るだろう」と楽観論を述べていた。これには、米国がなにか決定的な打開策を呈示するのだろう、といった希望的観測と、クリストファーはまったく現実を見ようとしないで、交渉が行われているということだけで自分たちの思惑に沿つた進行をしていると錯覚している、といった批判が出されていた。

交渉の最終段階に入った同三〇日、米国はパレスチナ・イスラエル交渉に対し、調停案を呈示した。それは、決議二四一、三三八を基礎にした包括的で永続的な和平解決を繰り返していくが、恒久的な体制に関わる事項は第二段階

ルサレムを含むのか否か、と入植地の取扱いを巡って対立、②レバノンとイスラエルは、同四二五を巡って、すなわち、同決議にも示されている、イスラエル軍の撤退を前提条件とするレバノンと、イスラエルの安全を保障する平和条約を第一とし、逆に、シリア軍の撤退を要求するイスラエル側との対立に終始、③シリアとの交渉でも、決議二四二に沿ったゴラン高原からの撤退を要求するシリア側と、自国の安全保障を第一とし、そのためにも全面的な外交関係の樹立を要求するイスラエルとの対立、ということまでのあり方の繰り返しであった。というよ

からの交渉に回し、現在は暫定自治について討議する、双方は対立の終結を、といったものだた。が、これには、パレスチナ、イスラエルの方から非難が噴出した。

パレスチナ側の中心的な批判点は、暫定自治局の権力範囲が曖昧であり、自治の領土上の範囲も曖昧、加えて、現在の封鎖と急ピッチの入植活動ということからも緊要の問題としてくるエルサレム問題が先送り、あいまい化されているといった点にあった。代表団は、〈これは、合意された内容、国連決議などに違反しており、討議の対象たりえないと（却下を示し）

二 米特使の派遣〔「破綻」の取り繕い〕

シオニストのシンクタンクと言われる、ワシントンの中東政策研究所のサハロフは、クリス・トファードが楽観論を展開したと同じ六月一四日、「全体的な進展は決して輝かしいものではなく、最終的に、交渉は死滅すると見ている」と語った。つまり、マドリッドで開始された米国の由来和平イニシアチブは、クリントン政権下で、破綻すると、シオニスト側も見ているのである。

ルサレムを含むのか否か、と入植地の取扱いを巡って対立、②レバノンとイスラエルは、同四二五を巡って、すなわち、同決議にも示されている、イスラエル軍の撤退を前提条件とするレバノンと、イスラエルの安全を保障する平和条約を第一とし、逆に、シリア軍の撤退を要求するイスラエル側との対立に終始、③シリアとの交渉でも、決議二四二に沿ったゴラン高原からの撤退を要求するシリア側と、自国の安全保障を第一とし、そのためにも全面的な外交関係の樹立を要求するイスラエルとの対立、というこれまでのあり方の繰り返しであった。というよりも、むしろ、〈イスラエル側の対応は討議を後退させるもの〉と、シャマス＝レバノン代表は非難した。

にもかかわらず、クリストファーは、同二三日に至つても、「米国は全面的なパートナーとしての役割を演じている。われわれはこの回で良き進展を作るだろう」と楽観論を述べていた。これには、米国がなにか決定的な打開策を呈示するのだろう、といった希望的観測と、クリストファーはまったく現実を見ようとして、交渉が行われているということだけで自分たちの疑惑に沿つた進行をしていると錯覚している、といった批判が出されていた。

交渉の最終段階に入った同三〇日、米国はパレスチナ側の中心的な批判点は、暫定自治当局の権力範囲が曖昧であり、自治の領土上の範囲も曖昧、加えて、現在の封鎖と急ピッチの入植活動ということからも緊要の問題としてされるエルサレム問題が先送り、あいまい化されているといった点にあった。代表団は、〈これは、合意された内容、国連決議などに違反しおり、討議の対象たりえないと（却下を示しつつも、最終的な決定は、チュニスの指導部に相談して発表する）とした。

他方のイスラエル側は、自治当局の権威のままいまい化という点では米国と一致しつつも、とえ第二段階からであるとはいえ、エルサレム問題を討議の対象にしていることへの非難であった。ちょうど、欧州諸国歴訪中のラビンは、ヘルサレムは、統一した、不可分のものとして、イスラエルの恒久的な首都であって、これを交渉の対象にすることは、交渉を破壊すること等しい」と何度も繰り返した。

こうした双方の対応に、クリストファーは、失意を隠せず、と同時に、自らの失態を隠すために、七月四日（クリントンにも自分にもやや和平を希求すべきだ）と脅しをかける始末であった。この発言は米国の失態、失敗をいつづけた。が、これには、パレスチナ、イスラエル双方から非難が噴出した。

シオニストのシンクタンクと言われる、ワシントンの中東政策研究所のサハロフは、クリスティーナ・トファーが楽観論を展開したと同じ六月一四日、「全体的な進展は決して輝かしいものではなく、最終的に、交渉は死滅すると見ている」と語った。つまり、マドリッドで開始された米国の由東和平イニシアチブは、クリントン政権下で、破綻すると、シオニスト側も見ているのである。

二 米特使の派遣＝「破綻」の取り繕い

クリントン政権は、これまで国務次官補として中東和平を中心に担当していたジエレジャーンをイスラエル大使に任命（ただし、年内は和平に専念）し、同時にロスを交渉特使（大使格）へと指名し、年内の交渉達成の意欲を示している。だが、それが非現実的であることは、第二次交渉の進展のなさにも示された。

前述の脅しの後、クリストファーは、ロス一行を中東に歴訪させた。だが、その構成は、親イスラエルやシオニストが顔を揃えたもの。（双方の違いに対して、合意しうる中間地點を見いだせるよう働きかける）と語ったが、中間地點とは、国際的な正当性ではなく、イスラエル側に寄つたものでしかなく、國務省内にも、成果は期待できないという声があつた。

彼らの歴訪に先だって、ペレスがエジプトを訪問し、〈米提案は聖書としてあるのではなく、叩き台だから、今後も継続することで一致する〉という見解を示した。その後、ムバラクがシ

たOAUサミットは、（国連に対してもリビア制裁の解除を勧告）する決議。そして、オーストラリアは、（私的セクターに対してもリビアとのビジネスの機会を閉じることを強制しない）と制裁解除を発表。さらに、国連の核専門家（米国人）も、（核に関する限りでは、イラクへの制裁はもはや必要ではない）と発表した。

だからこそ、米国は、イラクのミサイル問題を強調する必要があつた（七月二一日の査察団の突然の引き上げが端的な例）。し、サミットでイラク、リビア、イランへの非難で西側の一致を強調する必要があつたのである。

だが、他方で米国は、イスラエルとミサイルの共同開発などを推進しているのだから、これはアラブの感情を逆なでするものでしかなかろう。しかも、その一つのアロー・ミサイルは、七月一四日に六度目の実験に失敗。米議会内からも、共同開発見直しの声が強まっているが、クリントン政権は技術開発上の有効性を強調、強弁している。

イスラエル側はレバノンに対して、レジスタンスの存在が和平を妨げているし、自国の安全保障としての両国の平和条約のためにも、そのレジスタンスを支援している。シリア軍の撤退が必要であると主張している。これに対してレバノン側は、レジスタンスは国際法にも認められた正当な権利であり、根本問題はイスラエルの侵略と占領にある、それは安保理決議四二五にも示されており、イスラエルが同決議を遵守しても撤退すれば、レジスタンスはなくなるし、

を強調する必要があつたのである。
だが、他方で米国は、イスラエルとミサイルの共同開発などを推進しているのだから、これはアラブの感情を逆なでするものでしかなかろう。しかも、その一つのアロー・ミサイルは、七月一四日に六度目の実験に失敗。米議会内からも、共同開発見直しの声が強まっているが、クリントン政権は技術開発上の有効性を強調、強弁している。

イスラエル側はレバノンに対し、レジスタンスの存在が和平を妨げているし、自国の安全保障としての両国の平和条約のためにも、そのレジスタンスを支援している、シリア軍の撤退が必要であると主張している。これに対してレバノン側は、レジスタンスは国際法にも認められた正当な権利であり、根本問題はイスラエルの侵略と占領にある、それは安保理決議四二五にも示されており、イスラエルが同決議を遵守しても撤退すれば、レジスタンスはなくなるし、

政府はその武装を認めない、また、シリア軍の存在は両国の条約に基づいたもので、イスラエルの存在＝占領とはまったく異質の問題である、と対応している。

ところが、七月上旬に、米上院は、イスラエルの占領にはいっさい触れず、シリア軍の撤退を求め、さらには、昨年の選挙をも非難すると、決議を採択した。

これには、レバノン政府はもちろん、議会や全人民が反発、逆に、レジスタンスの正当性を強調することになっている。七月八日、レジスタンスはイスラエル軍の戦車部隊を攻撃し、二人死亡、三人負傷させた。イスラエルは、反撃を警告したのだが、翌九日、さらに三人死亡、五人負傷という被害を受けるために陥った。

こうしたレバノンの反発と南部の緊張を口実に（？）、ロス一行はレバノンを歴訪からはずした。が、これはレバノンとアラブの反発をいつそう強めることになっている。

八二年のレバノンへの侵略時に、シャーローン（当時の戦争相）は、「イスラエルの目的は、（PLO）の存在云々ということだけではなく）、レバノンが独立国家になること、自由世界の一員となること、そして、シリアの存在」という問題を解決することである」（シフ、ヤーリ共著、イスラエルのレバノン戦争）と述べ、八三年の五月一七日協定はそれを押しつけようとした。

が、いうまでもなく、それらは破綻した。にもかかわらず、交渉でのイスラエルの主張は同様の意図を露骨に示し、そうした意向に沿ったと言われている。

シオニスト側は、交渉を個々別々のものとし、アラブの離反を画策しているが、アラブ側はエルサレム問題にも示されるように、以前にもまして一体性を強め、国際的な正当性を主張しており、ロス一行はその結果をさまざまとみせつけられたのである。

アッサフィール紙は、「米クリントン政権を「危険な国際的問題児」と非難し、西側が現在はそれに追従的だが、その危険性を認識し、米国から離反するだけでなく、米国を非難するようになるのは、時間の問題だ」としているが、イスラエル政府からも非難されるAIPACの政策をそのまま採用した米上院の決議とその意向に沿ったロス一行の訪問回避などの米国の方と、ECやアラブ諸国との違いにも、米イニシアチブの破綻の方向がすでに示されている。

米国内においても、アラブ系やイスラム市民に対する差別との闘いが展開される一方、「国家利益のための評議会」は、イスラエルの弾圧

存在は両国の条約に基づいたもので、イスラエルの存在＝占領とはまったく異質の問題である、と対応している。

ところが、七月上旬に、米上院は、イスラエルの占領にはいっさい触れず、シリア軍の撤退を求め、さらには、昨年の選挙をも非難すると、決議を採択した。

これには、レバノン政府はもちろん、議会や全人民が反発、逆に、レジスタンスの正当性を強調することになっている。七月八日、レジスタンスはイスラエル軍の戦車部隊を攻撃し、二人死亡、三人負傷させた。イスラエルは、反撃を警告したのだが、翌九日、さらに三人死亡、五人負傷という被害を受けるために陥った。

こうしたレバノンの反発と南部の緊張を口実に（？）、ロス一行はレバノンを歴訪からはずした。が、これはレバノンとアラブの反発をいつそう強めることになっている。

八二年のレバノンへの侵略時に、シャーローン（当時の戦争相）は、「イスラエルの目的は、（PLO）の存在云々」ということだけではなく）、レバノンが独立国家になること、自由世界の一員となること、そして、シリアの存在」という問題を解決することである」（シフ、ヤーリ共著、イスラエルのレバノン戦争）と述べ、八三年の五月一七日協定はそれを押しつけようとした。

が、いうまでもなく、それらは破綻した。にもかかわらず、交渉でのイスラエルの主張は同様の意図を露骨に示し、そうした意向に沿ったと言われている。

シオニスト側は、交渉を個々別々のものとし、アラブの離反を画策しているが、アラブ側はエルサレム問題にも示されるように、以前にもまして一体性を強め、国際的な正当性を主張しており、ロス一行はその結果をさまざまとみせつけられたのである。

アッサフィール紙は、「米クリントン政権を「危険な国際的問題児」と非難し、西側が現在はそれに追従的だが、その危険性を認識し、米国から離反するだけでなく、米国を非難するようになるのは、時間の問題だ」としているが、イスラエル政府からも非難されるAIPACの政策をそのまま採用した米上院の決議とその意向に沿ったロス一行の訪問回避などの米国の方と、ECやアラブ諸国との違いにも、米イニシアチブの破綻の方向がすでに示されている。

五 結語に代えて

被占領地の封鎖はすでに三ヶ月半も続き、マルジ・アッズホールの被追放者たちは、七ヶ月

た米リイスラエル広報委員会（AIPAC）の強力な働きかけで、上院決議となつた。戦争で果たせなかつたものを、和平という名目で押しつけようというのである。が、これは自らの破滅への道を用意することにしかならない。

すでにその兆候が現れている。「パレスチナ人を他のアラブ諸国に移送させるべき」と語ったAIPACの中心的メンバーを、イスラエルの副外相ベイリンは七月五日、（過激派であり、リクード政権よりも極端である）と非難。AIPACは、その人物を含む二人の中心メンバーを、相次いで辞任させざるをえなかつた。

米提案に対してもラビンが強く反発したことは、先にも触れたが、これもシオニスト内部の矛盾を露呈することになつていて。内相デリの起訴（六月二〇日）にまで発展し、ラビン政権は、ユダヤ人の多数派を維持するために、右寄りの姿勢をとらざるをえない。かといって、シオニストと同じというわけにもいかない（し、シオニストを自認するクリントン政権も国際的な正当性を完全に無視するわけにもいかない）。しかも、連立政権内でも、PLOとの直接交渉を求める声（これは實質的には、閣僚の多数派になっているという）、人権無視を批判する声、撤退を求める声、などなどが続出している。

他方のリクード内部でも多くの矛盾がある。同党中央委議長がネタニヤフを独裁的と批判。他方、シャーローンが七月七日に、「領土上の妥協を通して、少なくとも一定の地域のコントロールを維持し続けること」が大切と発言して、同

党メンバーをびっくりさせた。

第九次交渉で進展がなければ、最後になるだろうとも言われながら、アラブ諸国は第一〇次の交渉にも臨み、「進展どころか、むしろ後退」とまで言いつつ、さらにロス一行の歴訪に対し、次の交渉への参加姿勢を示している。

アラブ側が交渉を拒否したとレッテルを貼らることをも射程に入れ、アラブの結束と国際的な支援を固め直していくためである。

アラブ側へのミサイル攻撃に対するアラブ側の反応は、再度アラブの團結を作り直していく可能性のあること、そして制裁解除の動きなど、国際的な支持を作り出せるなどを示している。

レバノン問題への米国の敵対的なあり方とは逆に、アラブ諸国や英仏をはじめとするEC諸国は、レバノンの再建に向けた援助を積極的に支援している。

四 アラブ側の対応

は、かつての南アの「パス法」と同様の差別を伴つたものであること、そうしたイスラエルへの米国の支援とAIPACとの関係などを非難し、国民の税金による援助の停止を要求しているなど、さまざまな運動が展開されている。クリントン政権は、イラクへの非難やモスラム原理主義グループの逮捕などをもって、イスラエルの蛮行から人民の目をそらそうと必死であるが、「われわれの社会の中に未一人を作るよりも、むしろ彼らの側に敵を作り出すことを選ぶ」とさえ広言する（イスラエル南部地区司令官、ビルナイ）イスラエルの弾圧と、パレスチナ人民の不抜の闘いは、パレスチナ問題への国際的な注目と米国の中間地点なるもののいいかげんなさへの批判を作り出している。

ニューヨークに本部があるジャーナリスト保護委員会が、六月二十四日に、「この一〇日間で射たれたり、殴られたり、拘留されるという事件がガザ地区で四件も起こっている」と非難声明を出したり、ミドル・イースト・ウォッチやイスラエルの人権運動がラビン政権の弾圧政策を非難し、イスラエル国会でも人権問題、拷問問題が取り上げられるなどしている。

こうした動きはシオニスト内部の混乱をいつそう拡大し、占領を正当化せんとする政策の破綻をさらに早めることになる。

のテント村での生活を強いられている。和平交渉は、彼らにも、そして、四八年の離散の人民にもなんら光をもたらそうとはしていない。だからこそ、人民は、和平に、それを推進しようとする部分になんらの関心も示さなくなつてゐる。というよりも、交渉の将来をバラ色に描いてみせようとするPLO指導部への批判の声がいつそう大きくなっている。

交渉団顧問のヌサイバ氏は、「われわれはインティファーダではなにもなしましていない。それは完全に、過去持っていたものの損失にしかなつてない」とゼネストの停止を勧告している。人民の大勢は、「和平」によって得られるものは少なく、失うものは民族的な一体性といふ一番大切なものであるとして、現在の交渉からの撤退と占領者との闘いを主張する。

六月二九日にガザでイスラエル兵士の射ちあいがあり、一人死傷という事件があつた。軍は小隊長の更迭でお茶を濁しているが、人民の闘いの成果＝占領政策の破綻の証しである。それなのに、闘いの縮小を提案し、交渉はバラ色と言えば、反発は当然であろう。PLOの現地機関とも言われた、民族統一指導部までが、現交渉の見直しを含めた、包括的な民族対話を提起するまでに至つていて（資料参照）。

クリントン政権は、国際的にも正当な権利と交渉の見直しを含めた、包括的な民族対話を提起する。そうした策動に乗るのは、抵抗の権利だけではなく、ひいては、民族的な権利をも放棄する

ことにもつながるであろう。交渉か武装闘争かといった二者択一の問題としてあるのではなく、民族権利を確立するため、武装闘争を含めた多様な闘いの一部として、敵の矛盾を位置づけ、ねばり腰の交渉の中で、敵の矛盾を暴露し、破綻へと追い込んでいくことが必要であり、そのためにも民族的な統一と総意を作り出していくことが必要である。

民主主義と団結のよびかけ

民族統一指導部による呼びかけ、第九六号

「われらが闘う大衆へ」

テロリスト＝ラビン政権は、われらが人民に対する弾圧、抑圧を強化し続けている。難を避けようとする家の中に入る者へのそれを含めた、無差別発砲は殉教者の数を急上昇させており、それには多くの子供たちが含まれている。加えて、数百人が負傷し、それ以上が逮捕され、数十の家屋が破壊されている。そして、経済的な包囲と飢餓への戦争。これらは、われらが人民を屈服させ、民族大義を抹消せんとするシオニスト擬制国家の意図と実態を暴露している。

占領当局は、国際的な人権基準を侵害し、われらが人民への一連の弾圧を継続するとともに、われらが聖なる都市、パレスチナ国家の首都、エルサレムの不当な併合のために、孤立化措置を強化している。

米国は、イスラエルに有利なように策動し、われらが人民の正当な権利に関する決議などの国際的な正当性と国際社会の役割を阻止する方向を採り続け、イスラエル寄り、パレスチナ对抗の敵対を証明している。

こうしたあり方は、占領者の措置への抵抗、自由と独立を達成する大道を突き進むわれらが人民の保護のために、すべての民族的な闘いとの要素の統一の必要性を示している。

民族統一指導部（以下、UNL）は、国際社会に対して、占領下のわれらが人民への保護を、同時に、われらが人民に対しては、占領措置と対決する闘いを拡大し、占領軍や入植者どもに痛烈な打撃を与える、民族的な活動への大衆的な参加を、よびかける。UNLは、占領計画に奉仕するあらゆる提案への抵抗を明確にする。

UNLは、ガザやすべての市、町、村、キヤンプにおける人民の闘いにあいさつを送るとともに、われらが人民の闘いの統一、帰還、自決、エルサレムを首都とした独立国家樹立という正当な権利の獲得のため、現場での團結の糸を強固にするよう、よびかける。敵＝占領者は、われらが人民の堅忍さの基礎を破壊し、苦難を拡大し、紐帯を粉碎しようとしており、対するわれらが諸機関、施設は、われらが人民の堅忍さと英雄的な闘いへの支援の拡大を必要としている。

第三、敵のエルサレムを孤立化政策に対するわれらが人民の拒否を確認し、以下をよびかけ認する。

〈インティファーダの大衆へ〉

し、ハマスの兄弟たちに活動と闘いの計画における広範な協調のため、対話をよびかける。

啓活動に関して

1、六月一日、国際子供の日、パレスチナの幼ない殉教者たちとの連帯を強め、われらが児童たちに対するシオニストの実態を暴露し、子供たちによるデモを組織せよ。

2、アイード・アドハを殉教者、負傷者、獄中の家族との連帯の日とし、社会的紐帯を打ち固めよ。

3、六月二～六日、第三次中東戦争の記念日に際し、闘いの拡大を。現場ならびに民族的な団結を強化せん。

4、六月四日、O・カーセムの殉教記念日。シオニストの獄中にある人々との連帯の広範な闘いを組織せよ。

5、六月九日、ゼネスト。パレスチナ国家の市町村やキャンプでのボランティア活動を。

6、五月二十九～三、六月一日、アイード・アドハ、商店は全日開店を。

7、六月二八日、エルサレムの「併合」宣言の日、敵のこうした決定に抗議し、ゼネスト。

8、UNLは、六月の日々を、民族的な闘いの拡大、入植者のテロとの闘いを拡大するよう、よびかける。

民族統一指導部
九三年五月二九日

一〇組織声明（抄）

九三年六月六日

「われらが人民、大衆へ」

よびかける。

第四、西岸の一部の会社が労働者の集団的な解雇を行っていることに警告し、雇用者側と労働組合との対話をよびかける。UNLはまた、民族産業を害するイスラエル産品のボイコットの嚴重な措置を確認し、それを特別パンフレットで告示する。われらが大衆は民族経済の手痛い打撃を自覚し、この問題を深刻に受けとめ、また、民族産業の所有者は、価格と品質の管理に責任をもつてあたるよう、よびかける。

第五、UNLは、モスラムとキリスト教徒の間の兄弟的なあり方を深めるよう、よびかけ、聖なるエルサレムでのこうした関係にあいさつを送る。宗派にかかわりなく、われらが人民は団結する。

第六、占領当局は、いくつかの村やキャンプで、被占領地の发展という名目の下、実際には民族経済を破壊するため、「民政府」と直結する委員会を創ろうとしている。UNLは、こうした危険な策動を拒否すること、形成された委員会を即刻解散すること、こうした委員会を云々する者に打撃を与えること、こうした者をわかれらが団結を破壊し、分断させる目的を持った当局の手先と見なすことを、宣言する。

第七、アイード・アドハ（犠牲祭）に際して、UNLは、アラブ、イスラムの諸国、人民とわれらがパレスチナ人民に対して、祝賀のあいさつを送る。

第八、UNLは、UNLこそが総合的な大衆行動を宣言できる唯一の主体であることを確認

UNLは、以下を確認する。

第一、UNLは、PLO諸組織の参加による、責任ある、包括的な、民族対話を支持する。シオニストの攻撃に対するわれらが人民の対応を統一し、われらが人民が拒否している諸問題への包括的で民族的な合意を作りだし、越えてはいけない一線を明確にするためである。

第二、UNLは、民族的闘いの継続、民族的な團結の深化、パレスチナ社会における民主主義の強化を確認し、すべての否定的な動向との対決を明確にする。UNLは、内部の民主主義を強化し、PLO内での闘い、民族的な統一へ当たるため、現場での團結の糸を強固にするよう、よびかける。敵＝占領者は、われらが人民の堅忍さの基礎を破壊し、苦難を拡大し、紐帯を粉碎しようとしており、対するわれらが諸機関、施設は、われらが人民の堅忍さと英雄的な闘いへの支援の拡大を必要としている。

第三、敵のエルサレムを孤立化政策に対するわれらが人民の拒否を確認し、以下をよびかけ認する。

「『民政府』による、金曜のアル・アクサ・モスクへの「礼拝者のコンボイ」なるものの拒否をよびかけ、同時に、アラブのバス会社がこうしたワナにはまらないよう警告する。また、ラマラとベツレヘムの間の（エルサレムを回避する）バス路線の運営を拒否すること、諸施設、機関に、エルサレムへの入域許可を得るといった、民族的決定への違反行為をしないよう、再びよびかける。

一、エルサレムの孤立化政策を拒否する、大衆的な抗議行動、とりわけエルサレムでのそれを

シオニスト擬制国家への支援の規模を暴露し、アラブの進歩的な諸国とアラブの團結と進歩への希望を破壊し、われらが民族に依存性を押しつけることを狙つたものであった。戦争においてアラブの土地の解放に向けた確実な闘いを開始し、パレスチナ革命と大衆、民族は、占領者を打倒し、被占領下のパレスチナ、アラブの土地を解放する継続的な闘いを担つてきている。

六月の初旬はまた、八二年のシオニストのレバノンへの侵略記念日にもあたる。パレスチナ革命を破壊し、レバノンに投降主義を適用させ、もって、レバノンの主権とアラブの一員としての存在を放棄することを認める条約を押しつけようとした。シオニストの軍隊は、はじめて、アラブの首都に入った。ベイルート、レバノンの防衛に当たった大衆は堅忍さを示した。パレスチナ、レバノン、シリアの戦士たちは、侵略者に多くの犠牲者を出させ、レバノンの民族的、

入れ、パレスチナ問題を米シオニストの解決で
いている。交渉団は、米国との討議をもって第
一〇次交渉での原則宣言受け入れ」「自治」の
適用へと道を掃き清めることを促進している。
—「指導部」は、その政策を通して、被占領
地内外のパレスチナ人民の民族的、大衆的な総
意がマドリッド＝ワシントンの方向を拒否して
いることから、それとともにあることを拒否して
いる。被占領地内のわれらが人民に封鎖が押
しつけられ、シオニストの政策がエルサレムの
併合を合法的なものにし、われらが闘う兄弟た
ちを追放することを正当化し、などなどにもか
かわらず、彼らは交渉へと進めている。

—第一〇次交渉は、深刻な危険性をもつてバ
レスチナ問題にのしかかり、それは他のアラブ
諸国にも大きな悪影響を与えることになる。一
部のアラブのアラブ官僚と民衆レベルでもシオ
ニスト擬制国家との正常化への歩みが進められ
ている。リビア人の一団の被占領地訪問、クウェー
トのアラブ・ボイコットの解除策動、モロッコの
の良く知られた役割などがそうした動きの代表
例である。

—一〇組織は、ワシントンの意向に沿った現
在の交渉への拒否を再度明確にしつつ、PLO
「指導部」と交渉団にすべての交渉からの即時
の撤収と第一〇次交渉への参加をやめるよう、
復し、われわれが解放、帰還、エルサレムを首
都とした独立国家の樹立というわれらが人民の

希いを基礎にパレスチナの民族的な立場を回復することを可能とする、民族的で、包括的な対話を開始する唯一の方途としてあるからである。

一〇組織は、イスラム、アラブの大衆に、こうした危険性を認識し、勇敢なインティファーダへのあらゆる形態での支援を提供するようよびかける。

一〇組織は、被占領地の内外の、われらが英雄的なパレスチナの人民に、こうした破滅への道とはあらゆる手段をもって対決し、以下の諸活動を開展するよう、よびかける。

六月六日、第一〇次交渉の開始を拒否することを鮮明にするために、被占領地内外で、ゼネストを。

六月一七日、被追放の七カ月目への突入。ゼネストとあらゆる活動を。

六月一七日、エルサレム併合宣言の記念日。われらがエルサレムの孤立化を狙った包囲を打ち破る大衆的な闘いの炎をかきたてよ。

* インティファーダ万歳！

* われらが殉教者たちに榮光を！

「ガザ第一論」の浮上（抄）

アル・シャープ紙、九三年六月一〇日

「五月」三日の閣議の後で発表された声明は、
「暫定解決に関する原則合意に達したとき、私はそれをまずガザに適用することを阻止するな
にものないと見なす」というもの。
この声明に応えて、交渉団長アブデル・シャ
フィは、「私はイスラエル側はガザはおろか他
のいかなる領土も放棄する準備はできていない
と考える」と語った。彼は、パレスチナ側はエ
ルサレムを含めたすべての被占領地のために交
渉をしていること、「ガザと他の地域を分け、
別個の行政体として取り扱うことを許すよう
するものは何もない」と付け加えた。彼は、し
かしながら、もしイスラエル側が無条件撤退を
望んでいるなら、パレスチナ側はそれを歓迎す
るし、現在の交渉の暗礁が打破され、イスラエ
ルがガザから撤退する時期に關して合意に達し
たなら、これを討議してもいいと語った。
同様の見解は代表団員のZ・アガからも出さ
れ、彼はパレスチナ側は自治について交渉して
いるわけではなく、「ガザからの撤退は他の地
域からの撤退とリンクしたものとしてあるべき
だ」「もし彼らが突然にガザから撤退すること
を決定したとしても、われわれはイスラエルに
留まるように要請したりはしない。パレスチナ
人はいかなる結果にも責任をもって対応する」
と語った。しかしながら、彼は、パレスチナ側
は国連か、たとえばエジプトやヨルダンのよう
な隣接アラブ諸国が権力の組織的な移行を支援

「ガザ第一論」の浮上（抄）

アル・シャーブ紙、九三年六月一〇日

ラビンは、「自治をガザで第一に」というものを発表したがパレスチナ人の間からもそれに光を与えるような動きが出ている。イスラエルの指導者たちが、人口過密で貧困なガザを、パ

同様の見解は代表団員のZ・アガからも出され、彼はパレスチナ側は自治について交渉しているわけではなく、「ガザからの撤退は他の地域からの撤退とリンクしたものとしてあるべきだ」、「もし彼らが突然にガザから撤退することを決定したとしても、われわれはイスラエルに留まるように要請したりはしない。パレスチナ人はいかなる結果にも責任をもって対応する」と語った。しかしながら、彼は、パレスチナ側は国連か、たとえばエジプトやヨルダンのような隣接アラブ諸国が権力の組織的な移行を支援

イスラム的なレジスタンス勢力は、シオニスト部隊、ならびに多国籍部隊を、ベイルートとバノンの広範な地域から撤退させ、五月一七日合意を失敗に終わらせた。その闘いは、侵略者とその手先どもから南部レバノン全域を解放する闘いとして現在も継続されている。

「われらが人民、大衆へ」

マドリッド＝ワシントン交渉を通して、シオニスト＝帝国主義の策謀とその目的は、われらが人民と民族に、投降主義を押しつけることにあるが、われらが大衆と民族によって拒否されている。にもかかわらず、「指導部」と交渉中の条件に沿った、破壊への道程を主張している。彼らは、人民の意志を否定し、米＝シオニストの占領による残虐な弾圧と包囲に目をつぶり、第九次交渉に参加すれば決議七九九が遵守され、フルジ・アッズホールの兄弟たち全員の帰還があるかのように言つてきただことに、口を塞いだ。米国は、ガザでの「自治」への第一歩として

パレスチナとシオニスト擬制国家の間の原則宣言の達成を策している。第一〇次交渉の前に準備されていることは、非常に危険である。だか
らこそ、被占領地内外の大衆、すべての自由の戦士たち、そして一〇組織は、われらが民族の原則を侵害するところのすべての計画を非難、拒否し、交渉団と「指導部」に対して、われらが人民の大義と権利のための闘いを継続するためにも、包括的、民族的な対話を開始することを交渉から撤収することを要請し続けている。

「われらが人民、大衆へ」
「われらがアラブとイスラムの諸民族、大衆へ」

こうした動きはアラブ・イスラムの大衆への、リビアの歴史（とりわけ、オマル・ムフタールの殉教とその原則、そして九月一日革命）への恥辱である。訪問は、被占領地内と離散のわからが人民のすべてから拒否と非難に直面した。

一〇組織は、こうした動きを非難し、同時に、それがリビア・アラブの人民とその指導部の立場を代表しているものとは考えない。したがつて、リビアのその路線とパレスチナの大義への

イスラム的なレジスタンス勢力は、シオニスト部隊、ならびに多国籍部隊を、ベイルートとバノンの広範な地域から撤退させ、五月一七日合意を失敗に終わらせた。その闘いは、侵略者とその手先どもから南部レバノン全域を解放する闘いとして現在も継続されている。

包围と弾圧をものともせず、パレスチナ人民の意志が自由と独立にあることを証明している、インテイフアーダの英雄的で堅忍な人民にあいさつを送る。一括帰還を要求し、われらが人民の鬭いと呼応している、マルジ・アップズホールの兄弟たちの堅忍にあいさつを送る。

これまでのあり方の維持のためにも、こうした犯罪に関わった者を処罰し、危険な流れに決着をつけるべきであると要求する。われわれはまた、一部のアラブ国家の中に、敵シオニストに対するボイコットをやめようと、いう声が上がっていることをも非難し、そうしたよびかけを停止するよう要求する。

（われらが大衆へ） 困難な状況と苛烈なシオニスト＝帝国主義の攻撃の中にもかかわらず、われわれは、パレスチナとアラブの闘いの旗が、われらが人民、民族の権利が回復されるまで、高く掲げ続けられることを確信している。

われわれは、被占領地内の大衆に、六月九日、インティファーダの六七ヵ月目突入に際して、ゼネストをよびかける。この日は、すべての地のわれらが人民によるさまざまな活動によって、神聖かつ重要な日とされる。

*われらが殉教者よ、栄光なれ！

〈その二〉

一〇組織は、インティファーダと被占領地内外のわれらが人民ならびにマルジ・アップホールの被追放者たちの堅忍さを高く評価し、あいつを送るとともに、以下を確認する。

一PLO「指導部」は、アラブの参加という口実でその破滅への道＝交渉の泥沼にさらに深く足を踏みいれ、われらが人民の民族的な権利を代償にして、シオニスト＝米国の条件を受け

リラは、レバノン国境近くの入植地を襲撃した。二人が死亡し、指揮者をはじめとする三人は逮捕された。その一週間後、ファタハとP.F.は「安全地帯」で、共同作戦を展開した。この作戦では、P.F.の二人が死亡し、イスラエル側に一人死亡、一人負傷の被害を与えた。

南部のファタハ筋は、ファタハのレジスタンスは、金、訓練などを自力更生で行っていると語った。これは、五人が使用した武器がM-16であることも示されているし、モサドに追跡の困難さを与えているという。

モカッダの戦略は、南部からの軍事行動であり、この決定は、アブデル・サイーハ師のP.N.C.議長辞任表明と同時であった。これはファタハ内で問題が起こっていることを示す。アブデル・サイーハの辞任発表の五月二三日以降、被占領地内でも同様のことが起こっている。

アラファトは、チュニスでのインティファード祝賀式典で、「今日は、レジスタンスの日であり、戦闘の日である。勝利は間近い。私は人民に革命を継続するためにあなたの方の子供を与えるよ、とよびかける」と語った。が、これを写していたT.V.カメラは、突然、「何のためにだ。マドリッド＝ワシントンに送るためにか」と叫んだ一四歳の少年に、焦点をあてた。この少年は、恐れるどころか、アラファトをにらみつけていた。

被占領地内外のパレスチナ人のほとんどは和平に拒否を示している。パレスチナの若者たち

都とする独立国家を主張している。

（シェーク・サイーハのインティファーダ）

サイーハの辞任は、PLOとパレスチナ人民の間に、混乱を引き起こしている。彼は、「和平交渉は、和平ではなく、投降である」と語ったが、こうした彼の辞任は、いうなれば、アラファトへのインティファーダである。

アンマンのパレスチナ筋は、彼の辞任発表の後、PNCメンバーが続々と辞任を表明し、その数は一八人以上に達していると語った。また観測筋は、これはアラファトにとって、交渉を継続するかどうかの試練である、多くのパレスチナ人は交渉の拒否を示しているが、アラファトは交渉がエルサレムへの最短の道だと考えていると語った。

サイーハの辞任前に、アラファトはPLOの機構を縮小し、そうした人員をリビアに送ると言明した。これは、アラファトとリビアとの秘密合意に沿ったものである。PLOの一部の責任者は、アラファトが組織内の若者グループを切ることを必要としている、彼らが和平に反対しているからだと語った。

（被占領地でなにが起こっているのか）

PLOは多くの問題を抱え、交渉では根本的な問題に直面している。そして、被占領地内の交渉への反対は明確である。インティファーダが開始以降はじめて、ファタハとハマスの共同闘争、共同宣言が大衆の前に示された。宣言は和平に反対し、武装闘争をはじめとするインティ

策を非難しているが、これはアラファート路線への非難でもあった。

両者の共同闘争は多くのことの変化、すなわち、和平を推進しようというアラファートの影響力が後退しただけでなく、レジスタンスの多くがアラファートを裏切り者と見なしていること、そんななかでファタハにとって、①アラファートからの独立、②ハマスとの共同、③和平の結果待ち、という方法しかないという。ファタハのタカが共同へと至ったのはそうしたことからきている、という。

被占領地は、PLOにとって試練の場になっている。重要なことは、アラファートの経済的、政治的決定に対し、人民の批判の声は日々大きくなっていることだ。

〈アラファート派と反乱派〉

情報筋は、三〇人の帰還はイスラエルの策略であり、パレスチナの内ゲバを導こうというものである、と語る。イスラエルは、PLOアラファート派がエルサレムに戻ること、そして原理主義者、とりわけハマスが、アラファート＝米国＝イスラエルの秘密合意を非難し、内部対立を作り出すことを狙ったのだ、という。

イスラエルが云々している、ガザ即時撤退論、ガザ第一論なるものもまた、パレスチナ内部の対立を狙つたものである。

被占領地では、ファタハとハマスという図式ではなく、ファタハ＝アラファート派などの和平推進派と、ファタハ・タカ派、ハマスなどの交

1993年8月31日 第92号 月刊 中東レポート

「して貰うことを希望する、「ガザはイスラエルに囲まれており、孤立して独自にというわけにはいかないし、それゆえ、包括的な解決が必要である」と彼は強調した。

交渉団全体の指導者であるファイサル・フセイニは、イスラエルが突然に撤退を決めたなら、ガザでは混沌状況が発生するだろうと語った。

彼は、こうした混乱はパレスチナ側が統治できないこと、「だからこそ、われわれは国際社会に対してもしそうした一方的撤退の後に混乱が続いたとしても、それはわれわれの失敗せいではない」という、「もしイスラエル側が本当に地域の利益を考えているなら、彼らはいかなる撤退も、「経済計画を有し、パレスチナ解放軍がガザの治安を維持できるように」PLOとの協調のもとに行なうべきであると語った。

アブデル・シャフィイは、「イスラエルの撤退が全面的なものか、入植地の位置はどうなるのか」などあいまいであることを指摘した。分析者の中には、ラビン声明を、世論受けを狙つたもので、世界にイスラエルのイメージを提供するためのものでしかないという批判もある。

「イスラエル側は彼らの真意を話してはいい。もし彼らが真剣なら、まず彼らに撤退しては解決できるだろう」と西岸の政治分析家A・M・ハムダンは語った。彼はまた、仮にパレスチナ側が暫定的な解決に関係するイスラエル側の原則を受け入れたとしても、被占領地からのイスラエルの撤退はなんら保障されてはいない

ファタハ内で反乱が起つてゐる（抄）

S・サバーハ、アル・ワタン・アル・アラビ誌
一九三九年七月二日

九三年七月二日

かならない、とも語った。

先週はじめに、ヤセル・アラファト＝パレスチナ大統領は、オーストリー首相を経由して、人口密集地域からのイスラエル軍の撤退を提案し、占領軍に代わって国連もしくは合意された国際勢力が入ることを勧告した。

九三年七月二日

ファタハ内で反乱が起っている（抄）

S・サバーハ、アル・ワタン・アル・アラビ誌、

PLO諸組織は、アラファトを大統領と呼ぶが、実力の伴わないそれを望んでいるし、大衆的にも彼への非難や怒りがある。

先週、アラファトは、ファタハ中央委で辞任劇を演じたが、これは彼が権力を握るために、これまでも行ってきたことである。現在、アラファトは大衆的な支持を失っている。南部や被占領地でそれが明確に示されている。

〈南部の秘密会議〉

パレスチナ筋の話によると、アイネヘルワ・キャンプでファタハの軍事指導者＝モカッダ佐を中心に、秘密会議が開かれ、サイダ地区のファタハの政策を全面的に変えたという。多くのメンバーはアラファトの路線に怒りを持ち、モカッダはアラファトの友を裁判にかけると語った。会議参加者たちは、アラファトのみがパレスチナを代表して話せるのか、政治と軍事

を天秤にかけ、策略を用いてゐるのではないか、な
どもその発言があつた。アラファートは、チュニスで
行われたファタハ中央委のレバノン地区部会で、
こうした軍部のあり方を危険な方向だと非難し
た。だが、サイダの会議は、全員がアラファート
への怒りを表明し、少なくともレバノンのレベ
ルでのモカッダの地位を確実なものにした。
モカッダは、昨年八月のマーディの暗殺の後、
軍事責任者となつた。アラファートは、彼の側の
人材がいないことから、独自の活動で大衆的な
支持を確立していったモカッダの就任を認めた。
通常、アラファートは彼の個人的な関係から、
コントロール可能な人材を選出している。そう
した影響力を發揮しうるのは、なんといつても
資金力である。アラファートが反アラファート感情
の保持者に資金を減らすことは、よく知られて
いる。実際、アラファートは、レバノン支部への
支払いを、これまでの毎月三〇〇万ドルから、
一二三万ドル、それも三ヶ月ごとにと変えた。
（武器を！ 武器を！）

多くの指導者はアラファートの資金力に依存し
ているが、モカッダの場合は、対イスラエル闘
争によつているという。彼は、その秘密會議で
も、「被占領地外からの軍事行動は重要で、た
とえば、ナハリヤへのミサイル攻撃はユダヤ人
を恐怖に陥しこむに十分である」と語った。
こうした考えは、アラファートには迷惑だろう
が、キャンプの大衆からは大きな支持がある。
ファタハは、イスラエルとSLAに対するゲリ

涉反対派の対立として、拡大するだろう、とパレスチナ筋は語った。

(*編注) ファタハのタカとは、ファタハの攻撃部隊の名称の一つで、ガザ地区ではこの名称を用いている。他にファタハでは、ブラック・パンサーという部隊(ジエニン地区など)も有名。ただし、ここでは、被占領地のファタハの「若者グループ」の意味としても用いられている。

イスラエル——殺しのライセンス(抄)

ロイター、九三年六月二九日

国際的人権運動が、イスラエルの指導者が「特務」に「殺しのライセンス」を与え、少なくとも一二〇人のパレスチナ人の死をもたらしている、と非難した。

米国に本部を持つミドル・イースト・ウォッチ(以下、M E W)は、「偽装部隊」「特務」が多く、逮捕に効力を發揮し、彼らがときには非常な危険にあるからといって、他の事例の殺人展開を正当化できない」と発表した。

「彼らの責任のもとでなされている、正当化しない殺人行為は、特異なことではなく、むしろイスラエル政府の承認の下でなされている一つの方法を構成する」。一八七ページにわたる報告は、「殺しのライセンス」と題され、八七年二月に開始されたイスラエルの占領に対するインティファーダの中で、「特務」によって少なくとも一二〇人のパレスチナ人が殺されている、と非難した。

M E Wは、インティファーダで一〇〇〇人以上ものパレスチナ人が射殺されていることにも触れているが、焦点を「特務」の行動に当て、「暗殺のため個々のパレスチナ人に的を絞つて」さえいると述べている。「われわれが不当な殺人と確信しているこの報告の一七の事例のうちたった一つしか軍事法廷に出されていない」、「そして二歳の少年を背後から射殺した唯一の事例でさえ、三ヶ月間の投獄という、軽微な処罰のは誤りの信号としてある」。

イスラエルは(アラブ人、女性、時には攻撃部隊に変装した)「特務」部隊を投入し、特定の活動家や壁にスローガンなどを書いている者などを狙った活動に従事させている。

たという。その約半数は九二年以降であり、ラビンが政権に着いてからは三〇人以上が殺された、という。なお「特務」は、八八年に、当時最も危険性を有してはいなかつた。「少なくとも一年を含む、二〇人のパレスチナ人が殺された、一七事例を載せている。

多くの事例では、犠牲者はなんら、もしくはほとんど危険性を有してはいなかつたが、逮捕、投降の機会も与えられなかつた。「少なくとも一つの事例は、**「特務」が、事実上犠牲者を逮捕した後に、処刑している。彼は危険性を有していなかつただけでなく、逃亡の可能性すらなかつた**」

和平過程の進展(?) (抄)

アンナハール紙、九三年六月二十五日

インティファーダ期間中に、イスラエル側は少くとも一一〇三人のパレスチナ人を殺し、他方パレスチナ人は一三四人のイスラエル人を殺した。また、パレスチナ人は、裏切り者(通敵者として、五六六人を殺したとされている)。

(*編注) 「特務」は、家宅捜査などで押収した、各組織の攻撃部隊の服装で、パレスチナ人活動家を「裏切り者」と「処刑」したり、別の組織を非難する文書の配布など、さまざまな攢乱戦術を展開している。文書の人数で、ちょっと曖昧な表現が用いられているのは、それを考慮したことだろ。

ン高原からの完全撤退という安保理決議四二、三三八の遵守を巡ってである。

パレスチナ側との交渉はなんら生産的ではなく、シャフィー・パレスチナ交渉団長をして「その信用性を失った」と和平過程の停止をよびかけるに至っている。

ヨルダンは、パレスチナが解決へと到達するまで、有効な合意には乗り気ではない。

シリアやレバノンもそうした立場を有しておらず、和平過程の進展はいつそうの困難さを作っている。なぜなら、パレスチナ＝イスラエル対立は「最も困難な」問題としてあるからだ。

イスラエルは、相変わらず、暫定自治期間に立法権力として、選出されるパレスチナ議会の承認を拒否している。イスラエルはまた、エルサレム問題に関して、「イスラエルの恒久的かつ不可分の首都」としての立場に固執し、被占領地の封鎖を継続している。P L O とパレスチナ交渉団はこうした条件の受け入れや、そうしたもとの選挙を受け入れるわけにはいかない。

もし、そうしたなら、彼らは自治選挙で負けることになろう。

ラビンは、仮に彼が望んだとしても、パレスチナ側要求への妥協を認めうるほどには強くはない。また、クリントン政権も和平交渉を前進させるためにブッシュするほどには強力ではない。米政権の弱さと米政界のイスラエルへの支持の強さは、もし、能動的に介入したら、圧力がかかり、彼らの利益にはならない。だが、和平過程が終結することはまずない。

なぜなら、どこもそれを停止したという責任を負いたくないからである。

ラビン内閣の危機と差別(抄)

エコノミスト誌、

九三年六月二六日—七月一日

れたら、シャスが消滅すると恐れている。

もし、ラビンがデリを解任したら、シャスは連立を離れるだろう。ラビンは、「ユダヤ人の多数派」を指揮下においていなければ、被占領地からの撤退ができないと考えている。

彼はヨセフ・ラビを説得し、シャスを連立政府内にとどまらせながら、デリを去らせたいのである。背景の違いにもかかわらず、首相とラビ(ヨセフ)の考えは近く、現在までは連立危機を解決することで一緒になっていた。しかし、もしデリ疑惑が継続的に勃発し続けるなら、そうした立場は困難になる。

ヨセフ・ラビは、セファルディの誇りを体現していると見られている。それは、セファルディに対する社会的な差別に由来し、それがシャスを創る要因ともなった。彼らの多くは、デリへの調査は、陰険なもので、逆に彼らの結束を強めているという。彼らは、検察当局の中心的な人物たちはアシュケナジであり、かつ正統派ではないと指摘する。

「他の人物へは、半時間か、一時間かの質問だった。私、ならびにシャスの同僚に関しては、彼らは搜索に次ぐ搜索を上から下まで、何かを見つけるまで行った」とデリは語る。が、法廷は、証拠なしと決定すると確信を持っている。

（*編注）セファルディとは中東地域出身のユダヤ人を意味し、アシュケナジとは欧州系のユダヤ人を意味する。後者が第一級市民であり、前者が第二級市民である。その下に、「ブラック・ユダヤスは、八四年に創立され、リカードや古くからのユダヤ教正統派の票をさらった。

シャスの宗教上の指導者、ヨセフ・ラビは、デリが閣議で発言力を持ち、闘うことを探んでいる。同ラビは、もしデリが政界退陣を強制さ

「ダヤ」と総称される黒人ユダヤ（以上がユダヤ）がおり、さらにその下に非ユダヤ教徒のアラブ人が存在する。イスラエル人ユダヤ人と考えがちだが、決してそうではないし、ユダヤ人ユダヤ教徒社会内の差別構造を理解する一助には幸いである。

被追放者たちの現状

六月一三日に暴露された、米、イスラエル、パレスチナのノルウェイでの秘密交渉なるものは、サウジをも巻き込んで、ガザでの自治を第一とし、西岸に三つの自治区を作るという方向だけでなく、一二月以来のテント生活を強制されている彼ら被追放者たちのことを、もはや障害ではなくた、としている。こうしたこと反映したか、実際、パレスチナ以外のアラブの紙誌でも彼らのことを取り上げることが少なくなってきた。

こうした現状は、彼らはもちろん、彼らの不抜性を称えている多くのパレスチナ人民の和平への不信と交渉推進部分への怒りを大きくさせている。

追放から七カ月目に当たる六月一七日、彼らは、例のように、黒旗を立ててデモをした。が、今回はイスラエル検問の近くまでは行かず、テント村周辺のものであった。ヨルダンから医師団が到着し、病気の人を中心検診することにならなかった。

ニストの自己矛盾＝破滅への道がそこにも示されている。

重要日誌

一九九三年六月一一日～七月一五日

- 六月一一日
- ・パレスチナ＝米討議開始。
- ・追放者、一人が不発弾の爆発で負傷。
- ・南部、レジスタンスの作戦一つ。ゲリラ一人死亡。
- 六月一三日
- ・エレカット、米国との違いは大きい。
- ・ラビン、交渉を継続するが、突破口が作られるとは予測しない。イスラエルは六七年国境に戻ることはない。
- 六月一五日
- ・第一〇次交渉開始（進展なし、本文参照）。
- ・南部、レジスタンスの作戦。
- ・ヘブロン、イスラエル・バスに火炎ビンなど。
- ・追放者、テント村周辺のデモ（資料参照）。
- ・カドゥミ、パレスチナ問題の解決なしに、中東に和平はない。
- ・南部、レジスタンスの攻撃三つ。SLA二人死亡。
- 六月一八日
- ・エルサレム地区、警官への銃撃、一人に負傷させた。

- 六月一九日
- ・人民の鬭い、ガザで中年女性が催涙ガスのため死亡、一五人負傷、ラマラでは、車の入植者一人が負傷。
- ・シャフィ、イスラエルの対応は和平の方向になく、交渉の停止を支持するが、アラブの統一した立場が必要。
- ・シャラー、安全保障云々を批判し、ゴランはシリアの主権。イスラエルのアラブ領土からの撤退が包括的和平の第一条件。
- 六月二〇日
- ・ガザ、人民の鬭い、ロイターのカメラマンが軍に殴られ、フィルムの没収など。
- ・南部、レジスタンスの攻撃、ガリリーにロケット攻撃。
- 六月二一日
- ・イスラエル、内相デリの訴追、内閣危機。
- 六月二二日
- ・ファタハ中央委、アラファト辞任劇を含む激論（資料参照）。
- ・レジスタンスの攻撃、ガリリーへのロケット。
- 六月二三日
- ・ガザ、人民の鬭い、二人の幼児も負傷。他方、CNNカメラマン逮捕され、英TVカメラは射たれて負傷。
- ・南部、レジスタンスの攻撃三つ。
- 六月二四日
- ・人民の鬭い、エルサレム地区で数十名が逮捕された。

なっていたからである。
検診の後、訪問医師団長M・サリム博士は、「五人は、イスラエルの獄中での拷問のせいに、関節に障害を起こしており、緊急の手術を必要とする。他に八人はレントゲン検査をしたほうがいい。その他にも、さまざまな病気を抱えている者がいる」と第一次所見を発表した。

被追放者たちは、さっそく、国際赤十字に対して、「入院が必要な病気の仲間たちが多くおられ、彼らを（人道的な措置として）病院へ連れて行くよう、要請する」とよびかけた。同時に、被追放者たちの医師などで構成する医療班は、この訪問医師団の検査を元に、詳しいリストを作成することにした。

後日、医療班のM・アッザハール医師が、

「病気や負傷者の数は六〇人以上にものぼるが、

緊急に入院すべき者は一〇人、その他に入院治療をした方がいい者は一八人である。これは人道的な問題としてあり、国際赤十字や人権主体が、積極的な支援と接触をするよう要請する」という発表とよびかけを行った。

彼らはまた、レバノン政府に対して、イスラエルが決議七九九に沿って彼らの一括帰還を受け入れざるをえないよう、安保理などへの働きかけを再度強化するよう、よびかけた。「われわれはレバノン領内おり、直接的な責任はないとしても、レバノン政府ならびに議会が一定の責任をもつて支援」するよう、要請とよびかけを行った。

同時に、彼らは、病気の者と医療班を中心に

取りざたされるあり方に対する、民族の大義を達成することをめざす、被占領地内外人民の意志を反映しての計画だったが、そうした行動が南の緊張を挑発することにならないよう、延期決定したのである。

実際、六月一一日、キャンプ周辺で山火事が発生し、その消火作業にあたっていた、A・タニーニ（三三歳）が不発弾の爆発で、軽傷を負うという事故も起っている。これは、彼らの置かれた状況が単に自然や病気との鬭いではないことを証明することになる。

交渉の停滞と封鎖の継続は、人民の和平交渉への不信と鬭いへの確信を強め、彼ら被追放者たちのエルサレム問題に対する見解などに、人の耳目が集中している。

さらには、イラクへのミサイル攻撃に対して、ニューヨークでの逮捕に對して、ラハマン師の逮捕に對して、彼らの怒りは人民の共感を呼ぶ。米国やイスラエルの意図が彼らの存在を忘れさせることにあるのに、逆にシオニストの行動は彼らの存在を強調することになっている。シオ

- ・ジャーナリスト保護委員会、イスラエル軍の報道陣への弾圧を非難（本文参照）。
- 六月二五日
- ・南部、レジスタンスの仕掛け爆弾で、SLAの謀報責任者死亡。他方、イスラエルはスール地区のDF事務所を空爆。
- 六月二六日
- ・西岸、人民の鬭い、三人負傷。
- ・南部、レジスタンスの地雷攻撃。
- 六月二七日
- ・ガザ、検問への銃撃（一兵士負傷）、攻撃側も射たれて一人死亡。
- 六月二八日
- ・アラファト、米はPLOとの討議再開を。イスラエルの国家テロを非難。
- ・南部、レジスタンスの攻撃（ガリリー一人死亡）とガリリーへのロケット攻撃、入植者六人負傷。
- 六月二九日
- ・ガザ、爆弾攻撃、兵一人負傷。
- ・南部、レジスタンスの攻撃、SLA一人負傷。
- ・MEウォッチ、「殺しのライセンス」を非難（資料参照）。
- 六月二四日
- ・イラク南部、米軍がレーダーを空爆。米政策への非難拡大、同時にイラク、リビアの制裁解除要求の声が拡大。

六月三〇日

- ・エルサレム、封鎖反対のデモ。

・イスラエル医療協会、「拷問のライセンス」にサインした医師を同協会から排除。

七月一日

- ・エルサレム、国家警察本部近くで、バス・ジャック。軍の乱射で車が爆発、ハマスの二人とイスラエル人二人死亡。
- ・交渉最後の日、パレスチナ、イスラエル双方が、米提案を拒否。

七月三日

- ・ガザ、軍本部に手投げ弾二発。兵四人負傷。

七月四日

- ・クリストファー、失意と脅し（本文参照）。
- ・ラビン、再び米提案を攻撃、ワシントンはパレスチナ側の要求に屈した。

七月五日

- ・レバノン、大統領、首相、報道機関など米上院声明に怒りの声（本文参照）。
- ・南部、レジスタンスの攻撃二つ、イスラエル兵一人負傷。

七月一〇日

- ・ペイリン、AIPACは過激派（本文参照）。
- ・ツェメル女史、五年間、ヒヤム収容所に裁判なし、弁護士や赤十字、家族との交信もいっさいなしという状況におかれている二二歳のパレスチナ女性の釈放を申請。

七月一一日

- ・アラブ、アラブ諸国は国連決議や正当な権利を放棄しない。
- ・南部、ガリリーへのロケット攻撃。

七月七日

・ガザ、軍の本部に銃撃。

- ・アサドリムバラク会談、米の公約をテストするため交渉を継続する（本文参照）。

・南部、またガリリーにロケット攻撃。

七月八日

- ・ガザ、特務が一人射殺、その後人民の闘い。
- ・また、西岸では、入植者一人射たれ、死亡、別の爆弾攻撃で兵一人負傷。
- ・南部、レジスタンスの地雷と待ち伏せ攻撃。
- ・イスラエル兵一人死亡三人負傷。
- ・ロス一行、イスラエルに到着（本文参照）。
- ・人民の闘い。

七月九日 インティファーダ六八カ月目に

- ・エレカット、米側がエルサレムに関する要求に応えるまで、交渉での進展はない（ロスとの会談にフセイニ、シャフィは参加せず）。

- ・南部、レジスタンスの大規模な攻撃、イスラエル兵三人死亡五人負傷、S LA一人を捕虜に。他方、イスラエルはGC基地の空爆と増強。

七月一〇日

- ・アシュラウイ、会議で勇気づけられたが、突破口には至っていない。エルサレムはPLOと直接交渉を

七月一一日

- ・ラマラ、一人射殺された（インティファーダの一三〇人目）。
- ・シャフィ、アラファトの独裁的な方針を批判し、PLOの大改組、民主的で集団的な指導部を。これはパレスチナの大義に関わる。

七月一五日

- ・南部、レジスタンスのロケット攻撃。他方、イスラエル軍はさらに増強。
- ・ロス、クリストファーに、年内達成の唯一の道は中心問題に焦点を当てる事と報告。

・西岸、人民の闘い、二人死亡一人負傷。

- ・ラマラ、アラブTV局を、当局が許可申請を黙殺した上で、許可なしと閉鎖命令。

・アラファト、PLO高官がワシントンでイスラエル高官と会談したと発表。

- ・パレスチナヨルダン高級会議、連邦の核となるエルサレム、難民、国境と安全、経済協力、水、立法の六つの委を作ることに合意。

- ・追放者、予定していたズムラヤ検問へのデモを情勢の緊張で中止。
- ・ガザ、人民の闘い、特務に射たれて、一人重傷（後日死亡）。
- ・イスラエルの人権運動、軍の殺人行為の拡大に再び警告。
- ・アシュラウイ、会議で勇気づけられたが、突破口には至っていない。エルサレムはPLOと直接交渉を